

資料による中日大辞典編纂所の歴史 1

今泉潤太郎

〈愛知大学名誉教授〉

中国（中華人民共和国）から返還された旧東亜同文書院華語研究会作製の華語辞典カードを基礎として中国語辞書を編纂すべく、昭和30(1955)年に愛知大学華日辞典編纂処（現在の中日大辞典編纂所）が設置された。愛知大学は戦後上海から引き揚げてきた東亜同文書院大学教職員・学生等を中心として創設されたことから、前身である同文書院の華語辞典編纂を引き継いだものといえる。

敗戦の際に、中華民国政府により敵産として接収されたこの辞典カードの行方に注意を払う者もいなかった頃、カードに着目しその返還をいち早く提起し実現させたのが、同文書院大学最後の学長であり愛知大学の創始者である本間喜一名誉学長である。本間は廃校となった同文書院の責任者としての責務を果たすべく何よりも先ず同文書院の教職員・学生のために新たな大学をつくった。同様に同文書院の華語辞典編纂事業の継承もまた己の責務とし、辞典カードの返還を実現させ、華語辞典を編集・出版して事業を完成させたのである。

中国大陸では1949年10月中華民国から中華人民共和国へとかわったが、この間、接収されたカードの行方を知るすべもなく全く不明のままであった。当時日本政府は新中国と国交を断絶していたので本間を含む民間の有識者達はさっそく新中国との国交を求めて日中友好協会の設立をはかった。本間は協会理事長となった内山完造らに辞典カード返還について話し、その協

力をえた。学内では中国語教授の鈴木擇郎にまず相談した。同文書院中国語教授としてカードの作製開始から敗戦時接收の立会いまで一貫して辞典編纂の責任者であった鈴木にとり、これは22年振りの辞典編纂の開始を意味した。引き揚げの際には、同文書院の学籍簿と成績表を自分の持物として持ち帰り、本間の信頼も厚く、共に愛知大学の創設に参加した鈴木であり、本間の思いは共有していた。この辞典の編纂に伴う困難を中国語専門家としてまた編集者として十分自覚していた鈴木であり、やはりカード接收の際に、事情が許せば我々の手で完成させたいと中国側に述べた思いはいやまし、これに応じた。

華日辞典編纂は、無一物から出発し財政基盤も無く常に経営難に苦しんでいた当時の愛知大学にとり歓迎されるものではなかったが、本間はこの事業の意義を縷々説き、やっと大学評議会がつけた財政に負担を与えない範囲においてとの条件で辞典編纂がはじまった。以来13年の日時を費やし昭和43(1968)年に『中日大辭典』が刊行された。同文書院が始めた“支那語大辭典”編纂計画を愛知大学が引き継ぎ『中日大辭典』として35年ぶりに完成させたのである。我国で初めて出た本格的中国語辞典として好評を博し、昭和61(1986)年に増訂版、翌年に増訂第二版が刊行され、共に数次の刷りを重ねた。そして平成22(2010)年には三版を出し今日に至っているが、初版出版は大学創立20周年、二版は40周年、そして三版は60周年の各記念事業の一つとして行われたものである。

愛知大学にとり『中日大辭典』の持つ意義は単に一中国語辞典の編集・出版に留まらず、中国との学术交流の発展に大いに寄与した点にある。出版を記念して中国に寄贈した『中日大辭典』は初版が1960年代末から70、80年代半ばまで、二版が80年、90年代にかけて中国で広範囲に且つ有効に使用された。愛知大学の知名度を高めた点でこれに勝るものは無いだろう。

実は中国では60年代に入るとソ連との関係が友好から敵対へと一変し各大学の外国語教育もロシア語から英語・日本語へと切り替えられたのである。あたかも日本語熱が急激に高まっていたこの時期に合わせたように贈呈された千数百冊の初版は、中日友好協会から全国各地の大学等の日本語教

育・日本研究機関や協会支部等の対日関係部門に配布された。当時、日本語を必要とする向きは地域、人数、所属などが限定されていたので誇張して言えば全中国に行き渡ったのである。また二版三千数百冊は国交回復後の日中友好の高潮期の折から中国教育部、国家経済委員会、中日友好協会等に贈られてから、さらに所属する多くの関係機関に配布された。当時、中国では外国の専門書籍は必要に応じて速やかに内部出版と称する海賊版の形で流通する仕組みを採っていたので、『中日大辞典』もいち早く内部出版された。そういった中での辞典贈呈は中国側の歓迎を受けるとともに広く関係方面に愛知大学の名を知らしめる契機になった。後に愛知大学が正式に中国の大学と学術交流を行う際に2名の中国教育部の幹部職員がわざわざ同行してくれ速やかに相手側との協定が締結できたことから窺い知ることができ、中国政府の好意と支持を得た点でも高く評価される。

ともあれ一般の日本語を学習したり教授したりする者は海賊版の方を手にして『中日大辞典』と愛知大学を知ることになるが、当時の中国人からすれば、それとてかなり高価で容易く買うわけにはいかなかった。発行部数など一切不明なのが海賊版であり、その数がどれほどか知るすべもないが、合わせて相当数が中国で使われていることは間違いない。日本人が中国(語)を理解するために編集された『中日大辞典』は中国人使用者に日本語を知るための辞典として先ず利用された。さらにこの辞典には当時の中国の規範的な詞典が採録しない多数の語彙が載っている点も中国人には便利であったようだ。この辞典が日本語を学び、教える中国人に与えた印象は極めて大きく、同時に辞典を出した愛知大学の名もまた人々の知るところとなったのである。このほか欧米の日本学・中国学専攻を置く二十数大学の研究所・図書館にも辞典各版が寄贈されており、愛知大学の存在が広く認知されたのである。

愛知大学は戦前海外にあった日本の高等教育機関のなかでも最も長い歴史をもつ東亜同文書院大学(東亜同文会経営)をその前身としている。先にも触れたが、敗戦により同文書院は廃校となり上海から引き揚げてきた同校の教職員・学生等を中心に昭和21(1946)年愛知県豊橋市に設立されたのが愛

知大学である。最後の学長として中華民国政府側と廃校処理をおこなった後、全員を連れ無事に帰国した本間喜一は、東亜同文会が解散となり同文書院の再建はもはや不可能と解った5月の時点から猛然と新大学設立活動を展開し、同年8月には文部省の設置認可を得て11月15日に新大学設立を実現させた。新大学の設立は先ず何より同文書院の学生・教職員のために必要であった。敗戦後の日本はGHQ（連合国軍総司令部）から出される矢継ぎ早の指示により国家の根幹から変換を強いられた。東亜同文会・同文書院も当時GHQから最も否定され忌避される存在の一つであったので、当初、新大学で採用予定であった同文書院の教授数名は就任を阻止された。このフィロソフィーに通じる名の新大学誕生は同文書院と無関係であると強調することなくしてありえなかった。しかし実は同文書院との関係があればこそ、世間の同情と支援を受けることも、文部省の了解を得ることもできたのであり、それなくして僅か半年内で新大学を設立するという奇跡が実現することなど到底有り得なかったのである。

東亜同文書院は日本人の経営する私立学校で、はじめ専門学校として発足し、次第に整備されて高等専門学校となり、のちに大学となった。敗戦にともない廃校となるまで、半世紀に近い歴史をもつことになる。東亜同文書院を経営したのは東亜同文会で、校名もこれに由来する。この団体は日清戦争後の明治31(1898)年、東亜会と同文会が合体したもので初代会長は近衛篤磨である。彼は日清戦争後、日本人とくに在華日本人が、西欧人と同様な態度を以って中国人に対して、これは後世に大きな禍根を残すこととなるから、日本人はよくその態度を慎み、中国問題も実相を研究し、百年の大計を定めるべきである、いま一番必要なのは中国問題を研究し教育することにあると考えた。当時、欧米列強のアジア政策、とりわけロシアの南進に対して強い危機感を抱き、“東洋人の東洋”というアジア主義の姿勢を明確にして清国との提携を主張した。近衛は己の主張と計画を清朝高官に説き、彼らの賛同と支持をとりつけ、明治34(1901)年上海に東亜同文書院を開設するに至った。

東亜同文会は広く全国から学生を募集するため各府県知事宛に官費給費生

派遣の要望書を出したが、その中で同文書院は全寮制で、日本人学生には華語（中国人学生には日本語）と英語を教え、生産工商業などの学術と法律経済などの知識を授け、傍ら（中国）内地旅行を奨励して、実地練習を行い、世間に活用できる人材を育成すると述べている。

近衛の考えに共鳴し、これらを自ら実践したのが東亜同文書院院長根津一である。根津が清国官民に同文書院を知らしめるために書いた興学要旨と立教綱領は、同文書院建学の精神ともいうべきものを示している。興学要旨においては、日中の英才に世界の実践的な学問を教え、日中友好の礎を築こう、そうすればアジアの平和と世界の恒久平和の計が立つと述べ、また立教綱領においては、中国学生には西欧の実用的語学を授け、日本学生には華語と英語、並びに内外の法律制度、商業工業の要点を授ける、大切なのは中国事情の理解であり、両国国家有用の士を育成するためであると述べている。根津は初代院長として、15年にわたり身を以って学生を教導した。同文書院教育の根本となる“書院精神”とよばれるものが根津一の人格に具現化されているとの考えは、同文書院卒業生がひとしく持つところである。

同文書院の歴史の中で、徐家匯虹橋路校舎時代すなわち大正6（1917）年——この年に自前の校舎を建てた——から昭和12（1937）年までの期間、特に満州事変までの15年間は最も輝ける時期であった。研究面では翌年支那研究部が設立された。これは書院が経済的にこれを設置し得る物的保証を持ち得たこと、教員スタッフが充実してきたことを表すものであり、日中関係の危なっかしい平和がその背景にあった。

支那研究部（のち東亜研究部に改める）創設の主旨は、「今や専門的、科学的探究により支那問題研究を行う必要がある。上海にあるという地の利は、支那研究遂行の使命を負っているわけで、研究部の創設を教育面に反映させるとともに、学術面での貢献を果たさねばならぬ」であった。研究部規程の中で注目されるのは、毎年学生の修行旅行計画（いわゆる大旅行）を編成し、これを指導する点である。これとともに、研究雑誌の刊行も注目される。『支那研究』（当初年3回）は大正9（1920）年に発行される（のち『東亜研究』と改題）。華語研究室はやや遅れて昭和3（1978）年の設立である。

同文書院において中国語は必須で最重要の学科であることは言うまでもない。そのため大正10(1921)年には常時十数名の日本人・中国人教員を擁し、中国語の研究・教育レベルは極めて高度であった。従来中国語教員によって華語研究会が組織され、教科書『華語萃編』の編集・改訂を行うなど研究活動は活発であったが、昭和2(1927)年度の東亜同文会事業報告書に華語研究室の新設と題して、「研究室は其数従来不足勝なりしを以て其の一部を補うため昭和2年12月もとの農工科教室の一部に多少の加工を施し之を華語研究室に充てり」とある。そしてその機関誌『華語月刊』が翌年7月に創刊された。

昭和15(1940)年5月の『滬友学報』(20号)にのる華語研究室の紹介では、「華語研究室は本院華語担任の部員及び支那人講師らによって組織されているが、当部発行の『華語月刊』は該研究室の責任編集である。その他本院使用の支那語教科書、参考書等は概ね該研究室の編著に係る」。『華語月刊』は「日本における最初の支那語研究雑誌で本院日支人支那語教授講師の執筆する高級支那語雑誌である」。また不定期出版物として、『華語萃編』初集・二集・三集・四集をはじめ、『支那語試験問題解説』、『標準支那語教本』初級篇・高級篇、『支那語構造の公式』、『北京官話旅行用語』、『商業応用文件』、『商業尺牘教科書』、『普通尺牘文例集』、『支那語概説』などの名がみえる。

『華語萃編』に代表される同文書院中国語教育は、書院卒業生の中国語能力等の実用面における評価だけが突出しているきらいがある。しかしこの教科書自体が中国語学研究成果なのである。『華語月刊』発行以前、中国語教員の研究発表の場はもっぱら『支那研究』であったが、これは総合的中国研究雑誌で、『華語月刊』発行の昭和3年までの間、中国語学に関する論文は数編が掲載されたにすぎない。

『華語月刊』は主として書院生を対象として編集されてはいるが、単なる学習誌ではない。40頁ほどのものながら中国語学に関する研究論文、語学教育実践上の問題提起と解決などが掲載され、昭和18(1943)年11月通算119号をもって休刊(結果的には廃刊となった)するまで、実に数百篇にのぼる研究論文が発表されている。論文以外にも、講義、演説、雑文など学習者む

きの記事も多く、総合的な中国語雑誌となっている。

支那語辞典の編纂は昭和8(1933)年の支那研究部事業報告の中に初めて出る。この他、四聲辞典の編纂もあげられている。当時、中国における国語辞典、いわゆる中国語辞典といえば、最初のものであろう周銘三編の国語辞典が1920年、王雲五大辞典が1930年、本格的な中国語辞典である国語辞典第1分冊が1936年になって出版された。日本の方がむしろ早く、大正年間には石山福治の中国語辞典、昭和に入り井上支那語辞典が1928年、竹田復の支那語辞典が1941年に出ている。いずれも内容的には極めて不十分で、使用者の必要に十分応ずるものとは言い難かった。

鈴木によれば華語研究会による中国語辞典の編纂は、井上辞典を出発点とし、これに必要な語彙を補充していくことから始められ、日本人メンバーは井上辞典に無い語彙をカードに書き込み、これに発音符号をつけ、日本語の語釈を加え、必要な例文と訳文をつけることから始められた。中国人のメンバーは適当と思われる単語を採録し、例文をつけること、またインフォーマントとして日本人作製のカードに目を通し必要あれば例文を添えるなど重要な役割を分担していた。すべて教授業の余暇を利用してカード作りが進行した。支那研究部華語研究室には昭和5年度事業報告書によると雇員一名が勤務とあるが、辞典カード作成が始まってからはカード整理の役目も兼ねたとも考えられる。

中国語教員で編纂業務に参加した日本人の氏名は『中日大辞典』「編者のことば」の中で列記され、さらに当時の同文書院教職員名簿によっても裏付けできるが、参加した8名の中国人は「特に姓名を略す」とされている。教員名簿にのる中国人教職員は十数名おり、さらに昭和19(1943)、20(1944)年度分は資料上の確認もできないので特定することは困難である。華語研究会の代表者であり、また辞典編纂の発起人でもある鈴木は中国人教員を8名と明言するも何故その姓名の公表を避け特に略したのか。日中間の複雑で敏感かつ深刻な関係は過去のもので、新中国が成立し国交が回復すれば両国間に明るい未来が約束される、との見方は一方的で楽観的にすぎる。国家・民族間の抗争・対立・矛盾に起因する様々な悲劇や不運から人は逃れるすべが

ない。殊に中国人にとり漢奸の問題は極めて深刻で生死に係るものであるのは論をまたない。敗戦当時各地で頻発したこの種の悲惨事を知る編者が、杞憂の譏りを承知の上で敢えて姓名の公表を避けたのはこのような思いからではないかと推測する。この点について一部に誤解が生じたようなので敢えて一言した。

昭和8(1933)年当時、辞典編纂に関与した主要メンバーは鈴木擇郎(書院15期)・熊野正平(17期)・野崎駿平(20期)・坂本一郎(22期)らである。熊野は昭和15(1940)年に退職、このあと内山正夫(34期)らの若手が引き継ぐように新たに加わった。日本人の中国語教員はほとんど皆が同文書院の卒業生でもあり積極的にカード作成に協力した。しかし、この間、戦争の拡大、深化により若手教員からつぎつぎと戦場に駆り立てられた結果、辞典編纂は停頓し大きな進捗は見られなかった。しかし上記『滬友学報』(20号)によれば「華語研究室で数年来編集集中の支那語大辞典は略完成に近づいているのであるが、事変以来担当者等多忙なため進度が遅くなっているようであるが遠からず完成を見るであろう」という表現となる。単語カードは多数作成されたが、辞典の編集はこれを基礎として初めて始まるのであり、ほぼ完成に近づいているのであるわけがない。事変以来云々の表現には複雑な思いを考じさせる。

いずれにしても、同文書院における華語辞典編纂についての記述は、本論文で紹介した若干の関係者による限られたものであり、詳細についての記録は分からない。ただ、現在中国国家図書館(旧北京図書館)に保存されている東亜同文書院大学資料は、敗戦後、中華民国政府に敵産として没収された同文書院の各種資料に相違ないことが確認されている。中華人民共和国が引き継いだ後、現在の場所でも未整理のまま雑然と書架に積み上げられたこれらの中に或いは辞典編纂に関する資料や記録等が混じっている可能性は十分にある。なお、辞典カードは当初からこれらの資料とは別に他の場所で保管されていたと考えられる。これについてはあらためてカードの返還の項で触れることとする。

ここで本論の後に別掲する資料について触れておく。この資料集には文

書、書簡など未発表の一次資料を含め、すでに新聞、雑誌、紀要等に発表された多くの資料を順次掲載していく予定である。本編纂所は今までに移転を繰り返してきた。最初は豊橋校舎の現教職員組合事務所の建物から現大学記念館（旧本館）内にあった国際問題研究所のあとへ、2、3回目は同じ館内で別の部屋へ、さらにその後名古屋校舎（みよし市）に移り現在に至った。部屋を移すたびにその都度ながしかの一次資料が散逸したり、破棄されたりした。日曜以外は毎日出校し授業時間以外は編纂処で編集に没頭した十数年であったので、辞典初版を出版した直後は、永年の編纂の苦勞から解放された安堵の思いが編者らを強く支配した。とりわけ同文書院時代からこの編集に携わってきた鈴木、内山の辛苦を推し量れば編者らの思いは至極もつともであった。その結果、一旦編纂処を解散することに決したが、このため資料は保管場所を失い、破棄されたり、散逸したりして影響は甚大なものがあつた。編纂処には30万枚を越す単語カードを取めた大きなカードボックスをはじめ、中国書・和書一万数千冊、十余年間分の中国新聞5種・雑誌十数種など、その他さまざまな資料があつた。中でも同文書院作製のカードを含め大部分のカードは使用済みということで全て焼却処分することにした。編者ら3名の研究室に分散して保管した重要な資料だけがかろうじて今に残つたものである。笹島キャンパスへの移転を目前にするいま、同じ轍を踏まないためにも本編纂所に保存されている諸資料をできる限り採録し整理しておくことが急がれる。この資料集はこれを意識して作成したものである。本論はここに採録した資料を参考に掲げて編纂所の歩みを辿るとともに『中日大辞典』編纂の全体像を明らかにし、その持つ意義を再確認するように努めた。編纂所の歴史についてかなり纏まった形ですでに発表された論文も資料として再録しているが、それらでは触れられていない点もこの中の資料により補充されるであろう。

また同文書院卒業生は、第1期から第46期まで19世紀前半の45年間にわたり約5千名を数え、特に社会の各方面で活躍し中国と日本を結ぶ懸橋的役割を果たす上で顕著な働きをしてきた。傍ら彼らは強い母校愛の絆に結ばれ最近に至るまで活発な組織的活動を滬友会の名で展開していた。現在、法人

としては解散したが有志の名で各種の催しを続行中である。資料集のなかには中日大辞典に関して彼等の発表した書簡・文書などでもできるだけ集めていることを承知願いたい。

資料

- 1-1 華語研究会
- 1-2 華語研究会会員

東亞同文書院支那研究部事業報告

東亞同文書院支那研究部

支那研究部規則

- 第一條 本部ハ支那ニ關スル各般ノ問題ヲ研究シ其ノ結果ヲ發表スルヲ目的トス
- 第二條 本部ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事項ヲ行ウ
研究資料ノ蒐集
部員ノ研究旅行計劃
學生ノ修學調査旅行計劃
部員及ビ學生研究ノ印刷發行
講演會ノ開催
- 第三條 本部ハ職員全部ヲ以テ部員トス
- 第四條 研究部二次ノ委員ヲ置ク
委員主任 一名
委員 若干名
委員主任及ビ委員ハ院長ヨリ之ヲ委嘱ス
委員ノ任期ハ一ケ年トス
- 第五條 委員主任及ビ委員ハ院長及ビ教頭ノ命ヲ受ケ本部ニ屬スル一切ノ事務ヲ處理ス
委員主任ハ委員カ處理スル事務ノ統一ニ當ル
- 第六條 委員ノ事務分担ハ委員會ニテ之ヲ定ム
- 第七條 部員ノ研究旅行及ビ學生ノ修學旅行ニ關シテハ別ニ定ムル所ノ規定ニ依ル
本部ノ重要事業は第二條ノ各項を實行するにありて今日まで擧げ得たる概要を記せば左の如し。

(後略)

〔注〕「滬友」第三二号（大正十二年）所載。

支那研究部

(一) 創設の要旨

列國が浮然として齊しく支那の根本的解剖に従事しつゝある時、古來隣國として殊に深甚なる關係にある我日本にとりて支那研究が學術的、經濟的將又政治的にも極めて緊要なるは言を俟たざる處なり。

而るに近代學術が凡ての對象に向つて然るが如く、支那研究に於ても放漫なる常識的議論を以て甘んずることの甚だ危険なるは自明の理にして、今や飽くまでも専門的、科學的探求により、凡そ精確に事實の真相を極むるの要あるべしと信ず。

本院は支那の要樞上海に有り、地の利を得て正に支那研究遂行の使命を負へるものと信はざる可からず。於茲大正七年秋本研究部は創設せられ一面學叢として本院教育の内容を實際に有効ならしめ、他面東亞文化の淵藪としてその使命を全ふせん事を期す。

(二) 本部の目的

支那に關する各般の問題を研究し其結果を發表す。

(三) 本部の組織

教授、助教授、講師を以て部員となす。(現在部員數二十九名 右内委員五名 内一名委員主任)

(四) 本部の設備(研究室)

本館

研究室、 六室、各一人専用

閲覧室、

内外新聞雜誌辭書類、索引類、インデキスカード、ポスター、傳單、寫眞其他を備付く

事務室、

事務員一人、助手一人、雜役一人

別館

英語研究室、

研究室二室、各一人乃至二人にて使用 閲覧室、専門の必要資料を備付く

華語研究室、

研究室三室、各一人乃至二人にて使用 閲覧室、専門の必要資料を備付く 雜役一人

簿記研究室、

研究室一室

(後略)

〔注〕 「創立三十周年紀念東亞同文書院誌」(昭和五年三月) 所載。

支那研究部の事業

當部は日滿支の關係愈々緊密の度を加へ其の使命の一層重大なるに鑑み益々その發展を期する爲め本年四月部内の組織を改革し新に陣容を整へ諸般事業の刷新を計ると共に豫ねて多年の懸案たりし二千餘冊の旅行報告書及び數千枚に達する寫眞の整理を初めとして従來華語研究會の事業たりし華語月刊の發行を當部に繼承し更らに左記各種の編纂を企圖し夫々擔任者を定め其の實現を計つゝあり。

- 一、支那語教科書
 - 一、經濟新聞の讀方
- 一、滿洲國全誌
 - 一、銀問題論叢
- 一、支那語辭典
 - 一、支那語、支那時文、試験問題解説
- 一、四聲辭典
 - 一、支那時文尺牘講義
- 一、支那西北全誌（青海、新疆、西康、西藏）

（後略）

〔注〕東亜同文会事業報告書昭和八年上半期（自昭和八年四月至昭和八年九月）所載。初めて辞典編纂の文字がみえる。

支那研究部の概要

當支那研究部は支那及び支那に關係ある研究をすることをその目的とし本院全教授を以て部員としてゐる。當部は大正九年成立以來既に二十年の歴史を持つてゐる。

當部は院長に直屬し一切の活動は部長を首班とする委員會の計劃の下に行はれる。

(中略)

五、華語研究室

華語研究室は本院華語担任の部員及支那人講師とによつて組織されてゐるのであるが、當部發行の「華語月刊」は該研究室の責任編輯によるものである。その他本院使用の支那語教科書、參考書等は概ね該研究室の編著に係る。尚該研究室で數年來編纂中の支那語大辭典は略、完成に近づいてゐるのであるが、事變以來担当者等多忙な爲進度が遅くなつて來てゐるやうであるが遠からず完成を見ることであらう。

六、統計研究室

此れは昨年成立したものである。支那に關する統計の研究整理を行ひその成果を發表する豫定であるが豫算の關係上發表が困難な状態に在る。

七、出版物

(甲) 定期出版物

支那研究 (季刊)

本院教授の支那に關する研究成果を發表する機關雜誌で本年二月を以て第五

三號を發行した。

華語月刊

日本に於ける最初の支那語研究雜誌で本院日支人支那語教授講師の執筆する

高級支那雜誌である。

(後略)

〔注〕「滬友學報」二二号（昭和十五年五月）所載。

支那研究部

支那研究部に於いては従来通り支那研究、華語月刊等を発行の外昭和十四年四月より「現代支那講座」六巻を發行して支那智識の普及に資したり。

(後略)

〔注〕 「創立四十周年東亜同文書院記念誌」(昭和十五年六月)所載。

東亞研究部

(前略)

二 華語月刊 第百十九號 (昭和十八年十一月發行) を最後として休刊。

〔注〕 東亜同文会事業報告書昭和十八年度下半期 (自昭和十八年十月至昭和十九年三月) 所載。

中国語担当教授名簿

大正八年一月

職名	擔當學科目	姓名
教授	漢字新聞、漢文尺牘、時文	青木 喬
教授	支那語	眞島 次郎 (二)
教授	支那語	吉田 增人
助教授	支那語	住田 肇 (十四)
講師	支那語	朱 蔭成
講師	支那語	述 功
講師	支那語	李 秀昌
大正十二年二月		
教授	支那時文、支那尺牘	青木 喬
教授	支那語	眞島 次郎 (二)
教授	支那語	清水 董三 (十二)
教授	支那語	内藤 一
助教授	(留學中)	鈴木 擇郎 (十五)
助教授	支那語	熊野 正平 (十七)
助教授	支那語	小竹 文夫 (十九)
助教授	支那語、倫理	久重 福三郎 (十六)
講師	支那語、漢文	朱 蔭成
講師	支那語	龔 煜
講師	支那語	述 功
講師	支那語	李 秀昌

昭和五年五月

教授	支那語	鈴木	擇郎 (十五)
教授	支那語	熊野	正平 (十七)
助教授	支那語	影山	巍
助教授	支那語	福田	勝藏 (二十)
講師	支那語	坂本	一郎 (二十一)
講師	支那語	朱	蔭成
講師	支那語	龔	焯
講師	支那語	述	功
講師	支那語	程	樸洵
講師	支那時文尺牘、中華學生部國文	齋	勳
講師	上海語	蔣	蘊
助教授	(米國在留)	久重	福三郎 (十六)
助教授	(北京在留)	野崎	駿平 (十八)

昭和九年度

教授兼學生監	中國語	鈴木	擇郎 (十五)
教授	中國語、科學概論	熊野	正平 (十七)
教授	中國語	野崎	駿平 (十八)
教授	中國時文、中國尺牘	福田	勝藏 (二十)
教授	中國語	影山	巍
教授	中國語	坂本	一郎 (二十一)
講師	中國語	程	樸洵
講師	中國語、中國尺牘	關	宗瓊
講師	中國語、中國尺牘	王	世英
講師	中國時文、中國尺牘	靳	鴻
講師	中國時文、中國尺牘	王	化
講師	上海語	蔣	蘊

講師
講師
講師
講師
講師
講師

支那語、
外國書購讀
支那語
支那語
支那語
廣東語

沈 關 金 馬 張 靳

茂 瀟 琪 天 慶
華 伯 亮 蕃

〔注〕東亜同文書院紀要による各年次別中国語担当者（華語研究会会員）。姓名の下の括弧内は同文書院入学期。